

# お互いを認め合うことのできる学級づくり

—本音・主張・納得の学びを通して—

教育実践研究科 教職実践専攻 教職実践基礎領域

小林 竜也

## I はじめに

私は大学生の頃、教育学ではなく、全く違う分野について研究をしていた。そのため、教育学に対する知識は、とても乏しいものであった。大学院の3年間の学びで、教育学を大学院の講義やゼミナール活動、実際の教育現場（連携協力校）を通して、理論と実践の2つの視点から学ぶことができた。

連携協力校である豊橋市のM小学校において、約1年半にわたる学校サポーター活動と各1ヶ月の教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを行わせていただいた。また、蒲郡市の小学校では1週間の教師力向上実習Ⅲを行わせていただいた。

本稿では各実習で自己肯定感や他者理解を高めるためにお互いを認め合うことのできる学級づくり—本音・主張・納得の学びを通しての研究テーマの基に、実践から得られた成果と課題について述べていく。

## II 主題設定の理由

### 1 今日の教育課題から

平成17年の「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」（答申）注1）によると、子どもたちの実情等を踏まえると、自他の生命を尊重し、学習や生活、仕事に前向きに取り組む力を育てることを特に重視する必要があると示している。

その背景として、子どもが自分に自信を持つことができず、自立心も育っていない状況が見られ、人間関係も希薄で集団としてのつながりが弱いからである。また、海外の子どもと日本の子どもを比較した調査からも、日本の子どもは、海外の調査対象国の子どもより、自分への満足感や自信、価値ある存在としての認識が十分ではないことが確認できる。そのために、自尊感情（自己肯定感、自己有用感など）、社会性（人間関係を築く力、社会規範を守る態度など）を高めるための具体的な取り組みの進め方の手立てを明確にする必要がある。

また、親が子どもに期待する内容を国際的に比較すると、日本では1位は自分の意見をハッキリ言う（69.3%）、2位は他人と協調できる（67.9%）、3位は困っている人を助けることができる（67.3%）と通常想像されるのとは異なる結果であった。世間が想像する上位を示すであろうとする項目「学校でよい成績をとること」は8位（11.6%）と期待する割合がそれほど高くない結果であった。学校で良い成

績を取ることが、親が子どもに強く望んでいないのが表1の結果からわかる。

【表1】各国での親の子どもへの期待  
「強く期待する」割合 注2)

	日本	アメリカ	フランス	スウェーデン	韓国	タイ
1位	自分の意見をハッキリ言う(69.3%)	困っている人を助ける(79.6%)	親のいうことを素直に聞く(80.1%)	困っている人を助ける(80.6%)	自分の人生の目標を持つ(64.2%)	男らしく、女らしくする(59.5%)
2位	他人と協調できる(67.9%)	親のいうことを素直に聞く(75.2%)	自分の人生の目標を持つ(74.7%)	他人と協調できる(78.2%)	自分の意見をハッキリ言う(59.0%)	他人と協調できる(53.8%)
3位	困っている人を助ける(67.3%)	学校でよい成績をとる(72.7%)	学校でよい成績をとる(70.1%)	自分の人生の目標を持つ(74.2%)	他人と協調できる(55.8%)	親のいうことを素直にきく(52.5%)
4位	自分の人生の目標を持つ(56.6%)	他人と協調できる(72.1%)	他人と協調できる	自分の意見をハッキリ言う(70.9%)	リーダーシップがとれる(54.9%)	困っている人を助ける(43.8%)
5位	男らしく、女らしくする(35.1%)	自分の人生の目標をもつ(69.8%)	自分の意見をハッキリ言う(54.3%)	親のいうことを素直にきく(59.6%)	困っている人を助ける(54.6%)	リーダーシップがとれる(38.9%)
6位	親のいうことを素直に聞く(29.6%)	リーダーシップがとれる(65.6%)	困っている人を助ける(48.8%)	学校でよい成績をとる(45.9%)	男らしく、女らしくする(46.7%)	自分の人生の目標を持つ(38.6%)
7位	リーダーシップがとれる(21.4%)	自分の意見をハッキリ言う(65.0%)	男らしく、女らしくする(39.2%)	リーダーシップがとれる(21.7%)	親のいうことを素直にきく(36.6%)	自分の意見をハッキリ言う(35.2%)
8位	学校でよい成績をとる(11.9%)	男らしく、女らしくする(62.2%)	他人との競争に勝てる(36.1%)	男らしく、女らしくする(11.5%)	他人との競争に勝てる(29.5%)	学校でよい成績をとる(28.9%)
9位	他人との競争に勝てる(11.5%)	他人との競争に勝てる(33.6%)	リーダーシップがとれる(33.6%)	他人との競争に勝てる(8.4%)	学校でよい成績をとる(21.5%)	他人との競争に勝てる(21.6%)

社会の背景から子どもの自己肯定感を高めることや他者理解ができる子どもの育成を図ることの重要性を知り、良好な人間関係を築くためにお互いを認め合うことのできる学級づくりが必要であると考えた。

### 2 サポーター校の実態と課題から

平成25年9月より連携協力校である豊橋のM小学校で約1年半学校サポーターとして関わってきた。学校の実態として、M小学校は通常学級は各学年2学級（3年生のみ1学級）、特別支援学級2学級、通級1学級の中規模校である。（平成27年2月現在）

児童の事態はどの学年も明るく、素直な子が多くいる。地域の活動への参加も盛んに行っている。

M小学校の特徴として、ふれあい班（児童集会や清掃活動）で行う機会を積極的に取り入れ、異学年交流も盛んである。また、あいさつに対する取り組みも活発である。あいさつ花道を設け、児童が毎朝校門の前であいさつをする姿が見られた。さらに、1か月に1度、各学級であいさつ名人も決めている。

しかし、課題として、自分の意見を出すことが苦手で、友だちとのかかわりがうまくできない。子ども同

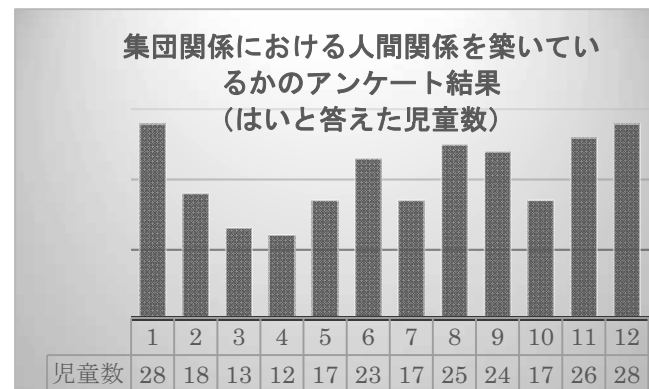
士の人間関係が薄い。他の子に対して無関心である子が多いことが挙げられる。

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでは4年生（男子14名、女子15名）の児童を対象に実践をさせていただいた。

教師力向上実習Ⅰを行う前に「集団関係における人間関係を築いているか」のアンケートを行った。全12項目で行い、「はい」か「いいえ」のどちらかで答えさせた。

【表2】アンケート内容（全12項目）：杉田（2009）による「望ましい集団活動を展開するための人間関係を築いていると判断できる状況チェック」を参考に作成（注3）

1. 学校は楽しいと感じますか。
2. 自分が困っていることに気づいたり、助けてくれたりする友だちがいますか。
3. 自分ががんばっていることに気づいてくれたり、ほめてくれたりする友だちはいますか。
4. 自分は友だちやみんなの役に立っていますか。
5. 自分にはいいところがありますか。
6. 自分の決めためあてに向かってがんばることができますか。
7. 困った時には友だちに相談していますか。
8. 友だちが困っているときは助けようとしていますか。
9. 友だちのいいところを見つけたり、ほめたりしようとしていますか。
10. 自分の気持ちや意見をはっきり言おうとしていますか。
11. 目標に向かって、みんなで一緒に自分も頑張ろうとしていますか。
12. 放課に一緒に遊ぶ友だちはいますか。



【図1】人間関係に関する状況チェック表2-1についてのアンケート結果（29名）  
アンケート結果から、「3. 自分ががんばっている

ことに気づいてくれたり、ほめてくれたりする友だちはいますか。」「4. 自分は友だちやみんなの役に立っていますか。」「5. 自分にはいいところがありますか。」「7. 困った時には友だちに相談していますか。」「10. 自分の気持ちや意見をはっきり言おうとしていますか。」の項目は約半分の児童しか「はい」と答えなかった。

この結果を見ると、自分の良いところを見つけることや自分の意見に自信をもって、友だちに伝えることができない子どもが多くいることがわかった。

私が約1年半学校サポーターをさせていただいた学校の児童も社会の背景のように、自己肯定感の低さや他者理解の薄さが明確にあらわれる結果となった。

### Ⅲ 研究の計画

#### 1 研究の目的

本研究では、学級活動や道徳、各教科を通して、何でも言い合え、互いの意見をさらけ出すことのできる学級環境を作るために、お互いが認め合うことのできる学級づくりを目的として考えた。そのために、「自己肯定感」「他者理解」「本音」「主張」「納得」の5つのキーワードを挙げて説明をする。

#### 2 目指す学級像・子ども像

①自己肯定感を高め、他者理解をすることで、他人の考えを共感し、意欲的に人間関係を築くことができる学級

「自己肯定感」

研究全体を通して、自己肯定感を高める実践を行う。自己肯定感とは、自分は大切な存在、自分はかけがえない存在と感じ取れる心の状態である。

「他者理解」

研究全体を通して、他者と向き合う実践を行う。他者理解とは他者の考えることを共感し、他者の考えを自分自身に置き換えることができることである。

②自分の意見や気持ちを本音で話すことができ、自分の意見や気持ちを相手に伝えることができる子ども

「本音」

自分の本音を出し、本音と本音を交流させることで、自分の意見や気持ちを相手に伝えることができる。手立てAである「構成的グループ・エンカウンター」のエクササイズで育成する。

③自分の意見に自信を持って、主張をすることができる子ども

「主張」

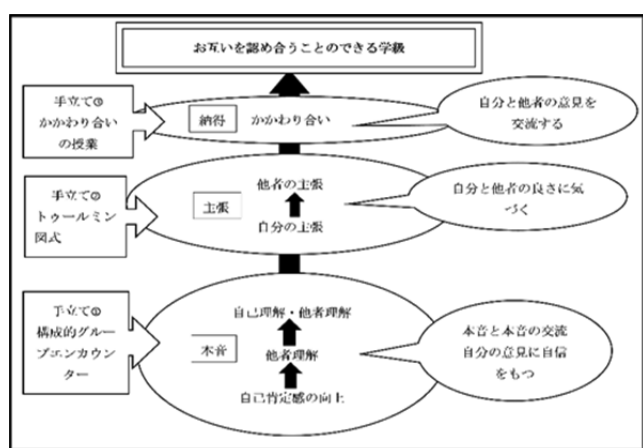
自分の主張に、事実や資料から見つけられる根拠とその根拠を関連づける理由を加えることで、自信を持って主張を述べることができる。自己主張をすることで、自分の考えていることや感じたことを他の子に理

解させることができ、自己肯定感も高めることができる。手立てとして「トゥールミン図式」を用いる。

④自分の意見と友だちの意見を取り入れ、かかわり合い、友だちの考えを十分に理解することで納得ができる子ども

「納得」

本音と主張が言える学級の基盤を作るために、かかわり合いの授業を行うことで、学級全体が納得できる意見の交流の場になると考える。納得とは、他人の考えや行動などを十分に理解して得心することである。手立てとして「かかわり合いの授業」を用いる。



【図2 研究構想図】

### 3 研究の手立て

手立て① 構成的グループ・エンカウンター

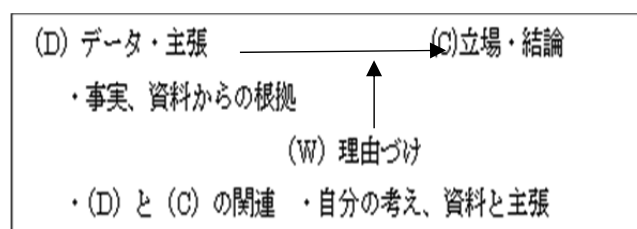
エンカウンターとは「出会い」「本音と本音の交流」という意味がある。グループ・エンカウンターはアメリカで生まれ、日本では1969年頃から導入された心理的グループ・アプローチである。健常者を対象に相互の関係を深め、集団での体験による自己の成長を目的としたグループ活動である。

具体的には自分を見つめ直す実践「自慢大会」や「良いところ見つけ」、他者を考える実践「名刺交換」や「言葉の花束」を行う。

手立て② トゥールミン図式

トゥールミン図式とはイギリスの分析哲学者ステイブン・トゥールミンが提唱した議論レイアウトである。図式としては議題に対する「主張（結論）」を支える根拠を「事実・根拠」と「理由づけ」に分けて、3つの要素を構造化したものである。

具体的には社会科の「自分たちの生活に必要な電気について考えよう」の単元で行う。トゥールミン図式は中学生の実践で用いられることが多いので、小学生でも書きやすいようにするためワークシートを工夫する。



【図3】トゥールミン図式のモデル 注4)

C (Claim)：結論に結び付ける主張

D (Data)：主張（結論）を支える事実

W (Warrant)：主張と事実を関係づける理由

手立て③ かかわり合いの授業

かかわり合いの授業を行うことで、学び合いができ、子どもたちの人間関係を良くすることができる。また、学力向上に繋がるとも考える。

【表3】学び合いのある授業づくりの手法

協同的な学びの手法として

- (1) 座席の工夫（机の向きをコの字型にする）  
→コの字型にすることで、子どもの顔と顔が見える状態で意見が言える。
- (2) 発言の仕方の工夫（「〇〇さんの意見と似ている」「〇〇さんの意見と違って」、「〇〇さんの意見につけたし」という3つの視点を発言前に取り入れる。）  
→3つの視点を持たせて発言をすることで、子どもの意見を関連づけることができる。
- (3) ワークシートに朱書きや下線を入れる。  
→子どもの意見を教師が認め、子どもの発言を促すことができる。

### 5 研究の仮説

（研究全体の仮説）

仮説1 研究全体の手立てを通じて、自分と他人の「良さ」や「思い」に気づくことで、意欲的に人間関係を築くことができる学級になるだろう。

（教師力向上実習Ⅰの仮説）

仮説2 構成的グループ・エンカウンターの手立てを用いることで、自分の素直な気持ちをさらけ出すことができる子どもに育つだろう。

（教師力向上実習Ⅱの仮説）

仮説3 トゥールミン図式の手立てを用いることで、自分の意見に結論だけ述べるのではなく、理由をつけて意見を述べるができる子どもに育つだろう。

（教師力向上実習Ⅱ・Ⅲの仮説）

仮説4 かかわり合いの手立てを用いることで、自分の意見と他人の意見を取り入れることができ、自分の意見を述べることで満足せず、他人の意見と向き合うことができる子どもに育つだろう。

#### IV 教師力向上実習 I での実践

##### 1 実践テーマ

自己肯定感を高め、本音で話し合える学級づくり

##### 2 実践のねらい

教師力向上実習 I を行う前に自己理解・他者理解に対してのアンケートを行った。(表 2 より)

アンケートにより、子どもたちの自己肯定感の低さがわかり、自己肯定感を高めるためには自己理解・他者理解を学級全体で高める必要があると考えた。

##### 3 実践計画

ねらい	学習内容	手立て
自己理解	実践①自慢大会をしよう「道徳」 個人活動→グループ活動	エンカウンター エクササイズ ①
自己理解	実践②ぼく・私の良いところ見つけ ～それがあなたの良いところ～「道徳」 個人活動→グループ活動	エンカウンター エクササイズ ②
自己理解 他者理解	実践③名刺交換をしよう「学級活動」 個人活動→学級活動	エンカウンター エクササイズ ③
自己理解 他者理解	実践④言葉の花束を咲かせよう「学級活動」 グループ活動→学級活動	エンカウンター エクササイズ ④

##### 4 実践の具体的な内容とねらい (実践前)

###### ①自慢大会をしよう

###### ねらい

自慢できることを書くことで、自分に自信が持てることは何かを確認することができる。自分を自慢できることで、自己理解ができ、自己肯定感の向上にも繋がると考えた。また、発表する時にリズム (♪ぼくの名前は 小林 竜也 足が 結構 速いん だよ♪) をつけることで、恥ずかしがらずに自慢をすることができると考えた。

###### 実践内容

1回目の実践として、作成したワークシートに自分の自慢できることをできるだけ多く書かせる。書いた中から一番自慢したいことを選び、グループで発表をしよう。発表をする前に、手拍子で、8拍子のリズムをつけて行う。実践後はワークシートに子どもの自慢できていることを認める朱書きを入れる。

②ぼく・私の良いところ見つけ～それがあなたの良いところ～

###### ねらい

連想ゲームのように良いところを見つけることで、良いところが単発的に終わるのではなく、多くのことに関連することができると考えた。また、良いところを連結させることで、良いところの数が増え、自分の良さに多く気づくことができると考えた。

###### 実践内容

1回目の実践をより深めるために、画用紙を使い、連想ゲームのように自分の良いところを書かせる。さらに、自分の良いところを書いた時の気持ちも書かせる。そして、各自自分の一番良いところを発表し、グループのみんなで良いところを褒める。発表した後に、グループ全員で、メロディに乗せて (♪それがあなたの良いところ♪) 発表してくれた子に褒める実践を行う。

###### ③名刺交換をしよう

###### ねらい

①、②の実践では自己理解を中心にグループ活動を取り入れて行う。今回の実践では名刺を用いることで、自己理解したことを相手に伝え、また、他者理解をすることで、自分と他者の理解を図ることができると考えた。

###### 実践内容

自分の良いところの名刺を作成し、学級全体で、名刺交換を行う。また、名刺交換をする際にルールを決めて行う。名刺交換をする時は子どもが好きな音楽を取り入れて行い、音楽が止まったら、近くの人と名刺交換をし合うゲーム性を用いる。

###### ④言葉の花束を咲かせよう

###### ねらい

これまでに分かった自分の良いところや友だちの良いところを書かせることで、自己理解・他者理解を相互に深めることができると考えた。また、1つの木に良いところカードを貼ることで、学級1人1人の良いところを再認識することができると考えた。

###### 実践内容

自分の良いところや③の実践で知った友だちの良いところをカードに書く。まずはグループ活動で行い、その後、学級全体で学級の言葉の花束を完成させる。

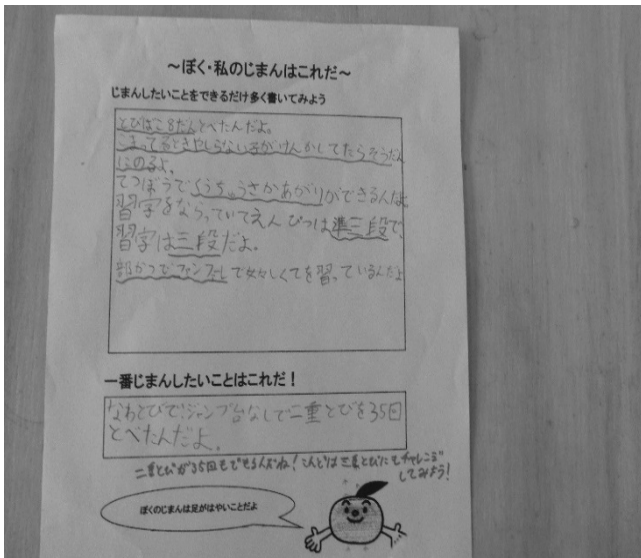
##### 5 実践の成果と課題 (実践後)

###### ①自分の自慢大会をしよう

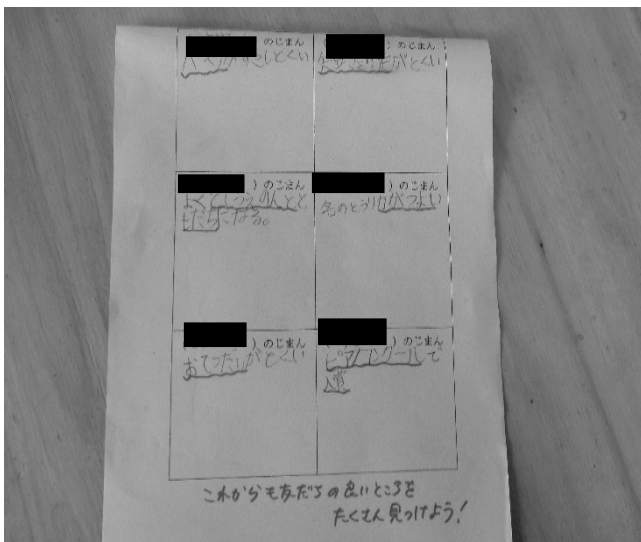
###### 成果と課題 (成果を○、課題を●とする)

○多くの子が5個以上自分の自慢を書くことができていた。一番多い子では12個も書くことができていた。  
●自分の自慢について1個も書けていない子が一人いた。自慢が1個も書けない子に対する声かけが不十分であった。一人でも書けない子がいたので、その子が

自慢できる何かを見つけてあげることが課題であると  
感じた。



【資料1】実践①の児童のワークシート（個人活動）



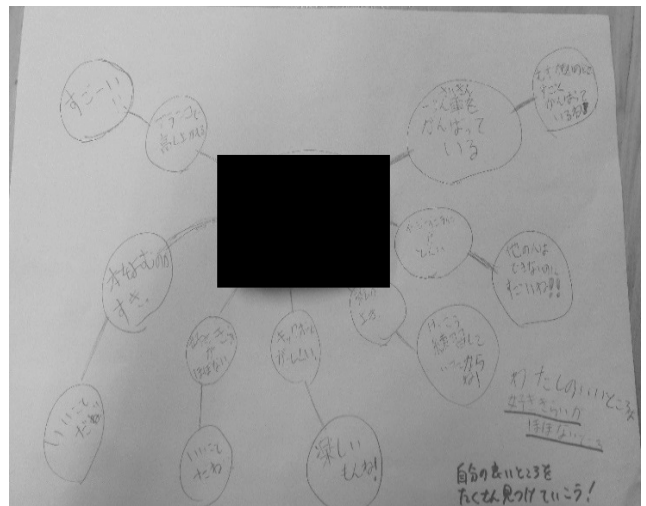
【資料2】実践①の児童のワークシート  
（グループ活動）

②ぼく・私の良いところ見つけ～それがあなたの良いところ～

成果と課題

○自分の良いところは1回目の実践の時よりも多く書けていた。さらに、前回の実践で一つも書くことができなかった子が、3個自分の良いところを書くことができていた。

●良いところとがんばったことについて子どもたちに書かせてしまい、ある子はどちらを書いてよいのか困ってしまう場面も見られた。良いところとがんばったことは違うことなので、区別をしてから実践に望むことが課題であると感じた。



【資料3】実践②の児童のワークシート

③名刺交換をしよう

成果と課題

○音楽を取り入れることや名刺交換のルールを決めることで、子どもたちが活動に積極的に取り組む姿が見られた。

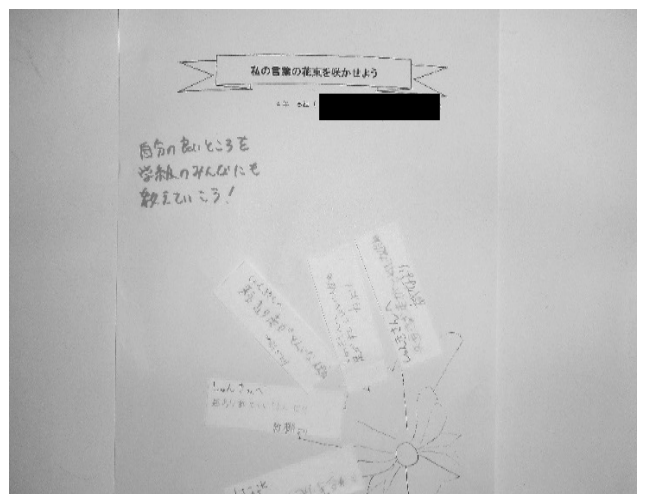
●一緒に休み時間に遊ぶなどの仲の良い友だち同士で名刺交換をしている子が多くいた。また、男女での名刺交換が全く行われていなかった。男女が交流しやすい環境を整えることが課題であると感じた。

④言葉の花束を咲かせよう

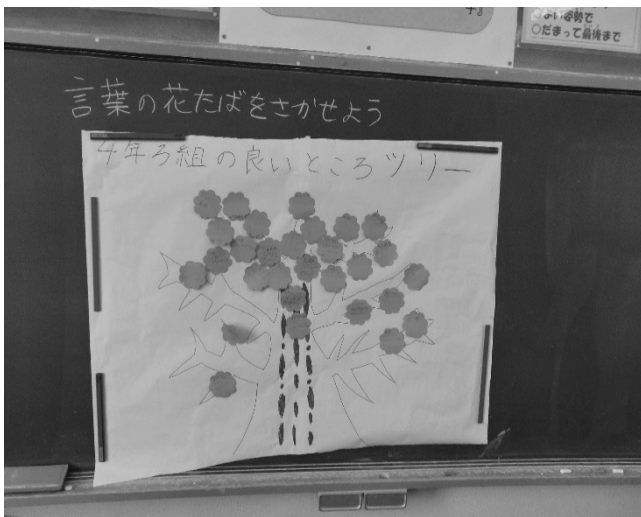
成果と課題

○子どもの中から「みんなたくさん良いところも持っていて、それを知ることができて良かった」という言葉が、自然と子どもたちから出ていたことは良かったと感じた。

●これまでの活動のふりかえりをする時間があまり確保することができなかつたことが課題であった。



【資料4】実践④の児童のワークシート  
（グループ活動）



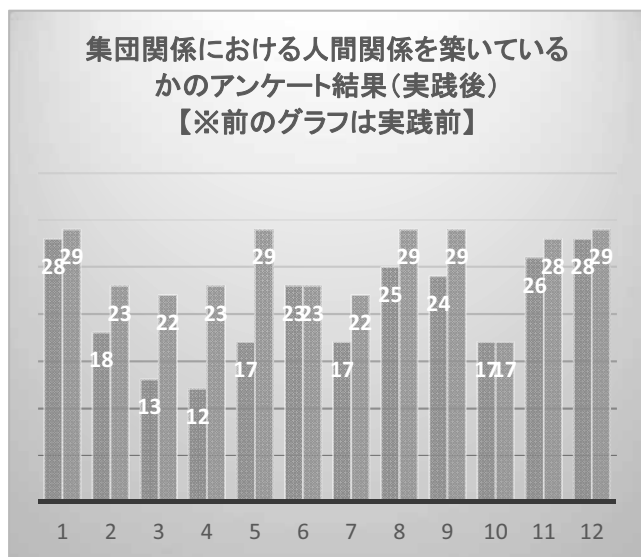
【資料5】実践④の学級活動の写真

## 6 手立ての有効性の検証

実践を行う前は自分の良いところや友だちの良いところに気づくことができる子が少なかった。今回の実践を行ったことで、自己理解や他者理解を高めようとする子どもの姿が見られた。

また、実践後のアンケートを行った。【図4】アンケートの結果から、特に、「3. 自分ががんばっていることに気づいてくれたり、ほめてくれたりする友だちはいますか。」「4. 自分は友だちやみんなの役に立っていますか。」「5. 自分にはいいところがありますか。」の項目で変化が見られた。実践前と比べ、自分の良いところを見つけることや自分の良さに気づき、褒めてくれる友だちが増えた。また、自分が友だちや学級のみんなのために役に立ちたいと思う子どもの数も増えた。

しかし、実践において、男女間での交流ができなかった。休み時間では交流が行われているが、授業になると、男女別々で行うことが多く見られた。男女が恥ずかしがらず、交流できるエクササイズを取り入れるべきであった。



【図4】 実践後の表1のアンケート結果

## V 教師力向上実習Ⅱでの実践

### 1 実践のテーマ

本音でかかわり合い、実感・納得の学びができる授業づくり

### 2 実践のねらい

教師力向上実習Ⅱではトゥールミン図式の手立てを用いる。根拠を示すことで、自分の意見に理由づけをし、自分の意見に自信を持つことで主張ができる子どもを育てる。そうすることで、意見が活発になり、本音でかかわり合い、実感・納得の学びを構築できる授業になると考えた。

### 3 実践計画

#### (1) 単元について

単元 自分たちの生活に必要な電気について考えよう。

#### (2) 子どもの考えを引き出すための手立て

手立て②-1 自分の考えを持つ

・教科書や副読本を使い、調べる場を設定することで、自分の考えをもつことができる。また、理由づけを記すワークシートを用いることで、考えに理由(根拠)をもって述べるができる。

手立て②-2 伝え合う

・友だちの意見に似ている場合でも手を挙げることを積極的に取り上げることで、自分の考えと友だちの意見につながりをもつ。

・聞かれた質問に対してわからないときは「おたすけマン」(質問に答えられる)をもうけることで、問題を一人で考えるのではなく、みんなで共有して解決していくことができる。

手立て②-3 活用する

・それぞれの発電の長所と短所を考えることで、どの発電をすれば良いのかを考えることができる。

#### (3) 単元計画について

実践	学習内容	手立て
①	暮らしの中から電気を探そう。	トゥールミン図式 手立て②-1
②・③	電気はどのように作られるのか調べてみたい。	トゥールミン図式 手立て②-1
④・⑤	発電にはどんな良さと悪さがあるかな。	トゥールミン図式 かかわり合い手立て ②-2、②-3
⑥	どのような発電が理想なのかみんなで考えよう。	トゥールミン図式 かかわり合い手立て ②-2、②-3

#### 4 実践の具体的な内容とねらい（実践前）

①暮らしの中から電気を探そう。

##### ねらい

生活体験を根拠に電気が使われているところを考えさせることで、自分の体験を根拠に理由づけをして、主張をできることがねらいである。

##### 実践内容

普段の生活でどのようなところに電気が使われているかを生活体験から考えさせる。また、電気がない暮らしについて考えさせ、電気がある今の暮らしと電気がなかった昔の暮らしについて考えさせる。意見を述べる時にどの体験から考えたのかの理由を問う。

②電気はどのように作られるのか調べてみたいな。

##### ねらい

電気を作るためにどのような作り方があるかを予想させることで、子どもたちの今までの知識がどの程度あるのかを見ることが出来る。また、予想をすることで、授業に関心を持ち、「結果を知りたい、調べてみたい」という学習意欲の向上に繋がると考えた。

##### 実践内容

第1時の実践で、電気がない生活についての不便さを感じる取ることができる。そこで、電気を作るためにどのような作り方があるのか予想させる。予想をさせることで、子どもたちの知識レベルを図ることができると考える。

③電気はどのように作られるのか調べてみたいな。

##### ねらい

第2時の実践と同様に子どもたちに予想をさせる。今回は日本ではどの発電が多く使われているかについて順位予想をさせる。予想をする際に、根拠と理由づけを考えることを定着させることがねらいである。

##### 実践内容

第2時の実践で電気を作るためにはどのような方法があるか予想した答え合わせを行う。また、そして、日本ではどの発電が多く使われているかを順位予想し、考えさせる。順位予想をした理由も答えさせる。

④発電にはどんな良さと悪さがあるかな。

##### ねらい

教科書や副読本からわかる事実を根拠として理解させることがねらいである。また、教科書を資料と認識し、自分の主張を支える事実であることをおさえる。

##### 実践内容

教科書や副読本をもとに、それぞれの発電の良さ（長所）と悪さ（短所）について調べる。良さと悪さについて個々で、調べ学習を行う。

⑤発電にはどんな良さと悪さがあるかな。

##### ねらい

教科書や副読本（資料）からわかったことを発表することで、気がつかなかった子にも知識を共有することができると考えた。また、資料の何ページや何行と示すことで、どこにその情報が書かれていたかを学級全体で把握できることがねらいである。

##### 実践内容

教科書や副読本からわかったことを発表する。良さや悪さがどこに書いてあったかを的確するために教科書や副読本の何ページの何行目に書かれているかも答えさせる。

⑥どのような発電が理想なのかみんなで考えよう。

##### ねらい

これまでの学習でわかったことを整理し、自分の主張に根拠と理由づけをすることで、説得力のある意見になることがねらいである。また、友だちの意見を擦り合わせることで、かかわり合いのある授業ができ、学級全体でどの発電が理想であるかを考えることが最大のねらいである。

##### 実践内容

これまでの学習からどの発電が理想であるかを学級全体で考える。始めに、ワークシートに自分の理想とする発電とその発電の根拠（理由）を書いた。そのあとで、自分の意見を主張し、友だちの意見も踏まえながら、どの発電が理想であるかをディベート方式で行う。

#### 5 実践の成果と課題（実践後）

①暮らしの中から電気を探そう。

##### 成果と課題（成果を○、課題を●とする）

○普段の生活で電気がどこに使われているかについて生活体験をもとに考えることで、多くの子が答えることができていた。また、理由づけをして考えることでみんながわかる意見になった。

C：テレビ。

T：テレビはどうして電気を使っているの。

C：コンセントに繋がれているから。（理由）

●自分の考えをワークシートに書ける子は多くいたが、発言をすることができる子が少なかった。

②電気はどのように作られるのか調べてみたいな。

##### 成果と課題

○電気はどのように作られているのかの予想を行った。予想を行うことで、色々な発電方法を自分のわかっている知識から考えだし、ワークシートに朱書きを入れ、意見を認めさせることで、積極的に意見を言えることができていた。

●発電方法を自分の知識で考えさせたため、自家発電と答えてしまう子が多くいた。自家発電は自分の家で



しかできないことなので、日本全体という視点を子どもたちに示す必要があった。

③電気はどのように作られるのか調べてみたいな。

**成果と課題**

○日本でどの発電が多く使っているか理由をつけて順位予想させた。結果を見ると、自分の考えたことと違っている子が多くいた。予想と結果が違うことで、驚きどうしてこのような結果になるのか興味を持ってくれる子が多くいたことは良かった。

C：1位 水力発電 2位 太陽光発電。

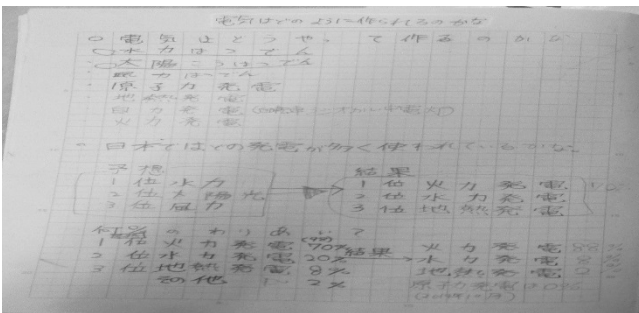
T：どうしてその順位予想をしたの。

C：エネルギーを使わないから。(理由)

T：1位火力発電、2位水力発電でほとんどが火力発電で日本の約9割の発電を占めているよ。

C：えー、予想と全然違う。

●私が子どもに対して間違った知識を教えてしまった。「原子力発電はまだ稼働している」と間違ったことを子どもに教えてしまったために、子どもの信用を失う授業になってしまった。教材研究の不足が課題であった。



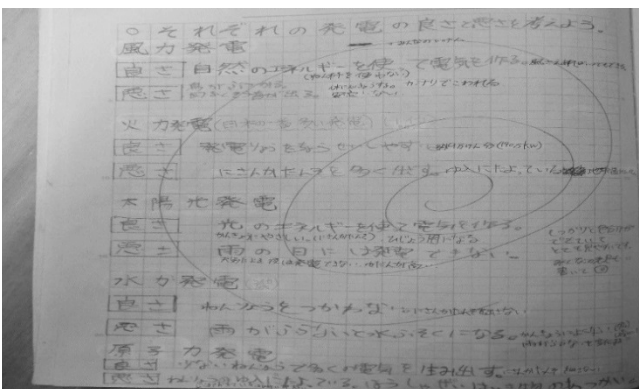
【資料6】実践②③の児童のノート

④発電にはどんな良さがあるかな。

**成果と課題**

○教科書や副読本を使い、個々に調べ学習を行った。調べ学習を進んでやる子が多くいた。また、教科書や副読本だけでなく、インターネットを使って調べた子もいた。

●短所を悪さと示してしまったことで、悪さを書く子が少なくなりました。悪さではなく、短所や問題点など示し方の工夫も大切であると感じた。



【資料7】実践④の児童のノート

⑤発電にはどんな良さがあるかな。

**成果と課題**

○調べてわかったことに私が朱書きを入れた。朱書きを入れることで、発言を促すことができると実感した。

●意見が言えない子は発表してくれた子の意見を言うのを待って書く子も多くいた。

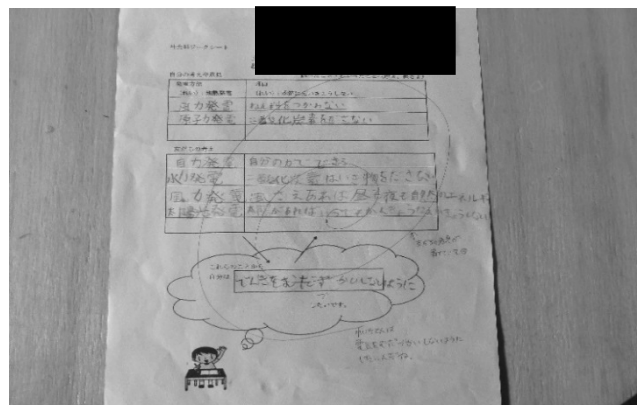
⑥どのような発電が理想なのかみんなで考えよう。

**成果と課題**

○これまでの学習を踏まえて、自分の意見を根拠と理由をつけて、発言することができていた。また、友だちの意見に賛成、反対、つけたしの視点を取り入れた。

意見がまとまらず、困っている子がいた時に、お助けマンの手立てを用いることで、一人で考えのではなく、みんなで共有して解決をする姿勢が見られた。

●自分の意見と友だちの意見を擦り合わせた結果から考えた子の多くがどの発電が良いのではなく、自分は「電気を無駄遣いしないようにしたい」と書いてある子が多くいた。結論を自分の視点ではなく、日本やみんなのためにと条件づけをすることが課題であった。



【資料8】実践⑥の児童のワークシート

**主張**

**自家発電**

- 理由1：自分で発電ができるから
- 理由2：二酸化炭素を出さないから

**水力発電**

- 理由1：環境にやさしいから
- 理由2：二酸化炭素を出さないから

**風力発電**

- 理由1：燃料を使わないから
- 理由2：風があればどこでもできるから

**太陽光発電**

- 理由1：二酸化炭素を出さないから
- 理由2：太陽があればどこでもできるから

【図5】授業で出たそれぞれの発電の主張

実践⑥の授業で多く出た意見の主張と理由である。この図から日本で行っている発電だけでなく、子どもたち自身で発電をしたいという気持ちも伺える。



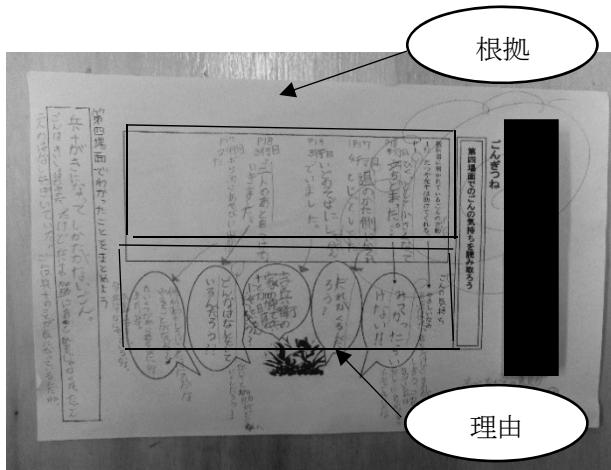
## 6 手立ての有効性の検証

ツールミン図式を用いた実践は主に中学生で行うことが多い。高岡の実践を参考にし、小学生でも実践ができるように考えた。理由づけをすることで発言する子の人数や回数が増え、自信をもって主張することができた。

だが、小学生で実践を行う際、主張をさせるためには条件づけ（1つの視点に絞らせる）をする必要があると実感した。また、小学生は理由よりも結論を先に述べるので、意見を考える前に、教師が子どもたちに「どうして」「なんで」と理由を考えさせる問いかけをすることが良いと考えられる。



【資料9】かかわり合いの授業実践



【資料10】国語でのツールミン図式を使ったワークシート

## VI 教師力向上実習Ⅲでの実践

### 1 実践のテーマ

かかわり合いの活動を通して、お互いの考えを認めることができるができる学級づくり

### 2 実践のねらい

教師力向上実習Ⅲではかかわり合いの授業を行い、自分の意見と友だちの意見に納得ができる子どもを育てることがねらいである。

### 3 実践計画

単元 5年2組のニュース番組を作ろう

実践	学習内容
①	ニュースはどのように作るのかな
②・③	5年2組のニュース番組を作ろう
④	5年2組のニュース番組を発表しよう

## 4 実践の具体的な内容とねらい（実践前）

### ①ニュースはどのように作るのかな

#### ねらい

実際のニュース番組を見せることで、子どもたち自身もニュース番組を作りたいと思える動機づけを与える。また、ニュース番組を作るためには多くの時間が掛かり、多くの人が関わっていることを理解させることがねらいである。

#### 実践内容

ニュース番組はどのようなものを視覚的に捉えるために導入で、実際のニュース番組を子どもたちに見せる。1時間のニュースを作るためには8時間も時間がかかることを子どもたちに伝え、ニュースができるまでの工程について教科書をもとに確かめる。

### ②・③5年2組のニュース番組を作ろう

#### ねらい

実際のニュース番組を意識させるために、1班3分以内の条件づけを行う。また、カメラで撮影することで、本番さながらの緊張感を持たせることができる。

#### 実践内容

実際のニュース番組と同じように意識させるため、各班で、原稿を作る。原稿ができた班からカメラを使い、1班3分以内で作った番組の撮影を行う。

### ④5年2組のニュース番組を発表しよう

#### ねらい

各班で撮影した番組を鑑賞し、良かったところやもっと工夫することを意見交換することで、より良い番組を作りたいと思ってもらえることがねらいである。

#### 実践内容

前時で撮影した各班の番組をテレビで鑑賞する。鑑賞した後に各班の良かったところやもっと工夫すると良かったところを発表し、かかわり合いの授業を行う。

## 5 実践の成果と課題（実践後）

### ①ニュースはどのように作るのかな

○実際のニュース番組を子どもたちに視覚的に見せたことで、自分たちもニュース番組を作りたいという動機づけをすることができた。



【資料11】実践①の授業風景

## ②・③5年2組のニュース番組を作ろう

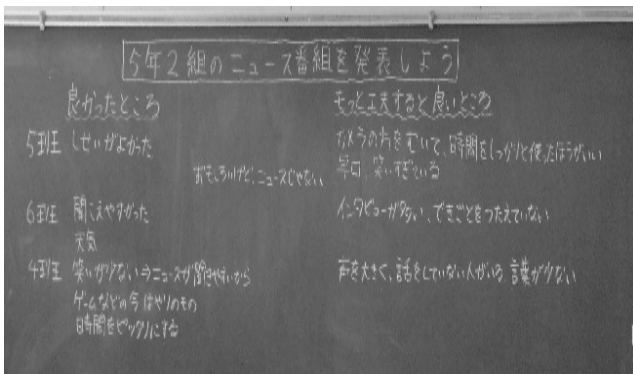
○ニュース番組を作る時に、原稿を工夫する班や資料を付け加える班、撮影の時には原稿を読む子やインタビューに答える子、時間を図る子と役割を決めて行っていた。

●ニュース番組ではなく、ものまねやクイズなどバラエティー番組のような番組をしている班がいたので、ニュース番組で行うことの内容を細かく伝えるべきであった。

## ④5年2組のニュース番組を発表しよう

○自分たちの班で作ったニュース番組を見て、声の大きさや言葉を伝える速さ、姿勢などに気づけることができていた。また、ニュース番組にはないものまねはやめた方が良く、ことにも気づくことができていた子が多くいた。

●ニュース番組をもっと面白くした方がいいという意見もあった。ニュース番組は情報を伝えるものなので、ニュース番組の視点を絞らせて、授業を展開すれば良かったと感じた。



【資料12】かかわり合いの授業の板書

### 6 手立ての有効性の検証

自分たちが作った番組を見て、良かったところやもっと工夫すると良いところを意見交換して、かかわり合うことで、今回作った番組よりもっと良い番組を作りたいと思う子どもの姿が見られた。かかわり合いの授業をすることで、「もっと良くしたい、もう一回作ってみたい」という意見が多くの子から出たので、かかわり合いをすることで子どもたちの学習意欲の向上に繋がることを実感することができた。

## VIII 本研究のまとめ

グループ・エンカウターのエクササイズ理論を用い、実践することで、自分の良いところを書くことができる子が増えた。また、一つも書くことができなかった子も3個自分の良いところを書くことができた。また、「みんなの良いところをたくさん知れて良かった」と話す子どももいた。したがって、継続的に行うことで、お互いの良さを知り、本音と本音が言い合える関係を築くことができると感じた。トゥールミン図式で

は、実践をする前は発言する子が少なく、発言をしても意見がまとまらずに意見を述べる子が多くいた。実践をすることで、理由をしっかりと述べて意見を言うことで、自信を持って主張することができた。小学生は結論を先に述べる子が多いので、結論から自分の意見を考えるのではなく、理由を考えてから結論を出す授業実践をより多くの場面で取り入れていく必要がある。

## IX 今後の教育課題～本研究を通して～

サポーター活動や実習を通して、最近の子どもたちは自分の感情を素直に表わすことができない子が多くいることがわかった。お互いの感情を言い合えるためには、自己理解・他者理解をし、意見が言い合える関係性を築き上げていくことが今後の学校教育での課題であると感じた。今後、さらに核家族や人間関係の希薄化が進むと考えられる。学校は子どもたちの人間形成をし、コミュニケーションを高める場であることを再認識していく必要があると思う。

## X おわりに

私は教職大学院での3年間の学びを通して、教育学の理論を色々な先生方から学ぶことができた。そして、様々な学校で授業実践をさせていただいた。

教師とは子どもたちに夢や希望を持たせる職業であり、子どもたちの成長こそが教師としての使命であることを肌で感じ取ることができた。

多くの学校で子どもたちの輝く姿を目の当たりにし、子どもたちの成長に驚かされる一面も多くあった。

教職大学院での経験を生かし、これからも研究と修養を怠らないように努力をしていきたいと思う。

### 【引用文献】

- 注1) 中央教育審議会「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」(答申)2007年1月
- 注2) 国立女性教育会館「家庭教育に関する 国際比較調査報告書」2005年
- 注3) 杉田 洋「よりよい人間関係を築く特別活動」(図書文化社)2009年
- 注4) 高岡昌司「兵庫教育大学付属小学校研究発表会概要 社会科部提案」2005年

### 【参考文献】

- 杉田洋「よりよい人間関係を築く特別活動」(図書文化社) 2009年  
片野知治「教師のためのエンカウンター入門」(図書文化社) 2009年  
国分康孝「構成的グループ・エンカウンター」(誠信書房) 1992年  
佐藤幸司「とっておきの道徳授業 V」(日本標準) 2006年  
児玉 修 宮崎大学「全国社会科教育学会「理由による正当化」から社会科授業を読み直す」(2011年)  
高知県教育センター「子どもの自尊感情をはぐくむ 学校についての一考察・県教育委員会」(2005年)

### 【付記】

教職大学院の3年間の学びで、教育学の理論を教えていただいた先生方。学校サポーター、教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでお世話になった豊橋市立M小学校の校長先生、教頭先生、教務主任の先生、配属学級の先生方。ご指導していただいた山田先生。教師力向上実習Ⅲでお世話になった蒲郡市立M小学校の藤田先生や配属学級の先生。ご指導して頂いた志水先生。日々の悩みや研究の助言をしてくださった前教授の白井先生や川北先生に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございます。